

新・鬼師の世界

— 周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」—

(株)伊達屋 — YUHIRO I.

高 原 隆

まずは、タイトルの説明をしながら、この章の簡単な導入としたい。『鬼師の世界』を2017年に出版してから、今年で(2022年)5年が経つ。すでに『鬼師の世界』を纏め始めていた頃から気づいてはいたが、その当時(2015年)ごろから鬼師の世界で大きな変化が起きていた。世代交代の波である。しかし、その頃は同時に親方(又は社長)に当たる鬼師はたとえ世代交代をして、役を降りていたとしても、なお現役で仕事をしており、旧世代から新世代への移行が急激でも、また、明白でもなかったのである。ここが私を含めた通常のサラリーマン社会と大きく異なるところである。ところが、ここ5年の間に鬼師の世代交代はより鮮明になり、かなりの鬼板屋において、世代交代が完了し、さらに実質的な運営者が息子の世代に代わってしまった。それ故に、「新・鬼師の世界」と銘打って、何が進行しているのか、何が変わったのか、などを中心に再調査を始めたのである。また、何が継続しているのかを見極めることによって、「伝統」とは何かが浮き上がって来る。その中の大きな動きの一つとして考えられるのが「周縁の再中心化」と呼ぶ一連の運動である。さらに「周縁の再中心化」の中でも特筆すべき出来事が「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション(2020年10月30日～2021年1月29日)であった。

すでに同じ副題－周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション－で、3篇を書き終えている。「はじまり」、「山本鬼瓦工業(株)」、「(株)丸市」がそれぞれであり、それぞれをその1、その2、その3とすると、この章はその4に当たる。タイトルは「(株)伊達屋－YUHIRO I」である。もちろん、その1から順に通読して行けばより理解は深まるが、その4のみでも理解できるように工夫して記述していく。ここでの主旋律(Themaテーマ)は「周縁の再中心化」である。

(株)伊達屋

「伊達屋」については別の章立てでもって詳述するが、ここではまずはその簡単な紹介をする。伊達屋は文字通り伊達な鬼・瓦・屋である。つまり「粋(いき)」で「人目を惹く」鬼・瓦・屋なのである。特に、鬼師の世界においては…。鬼師の世界で活躍する、又はして来た鬼師は男性である。そこでは一般認識として、「鬼師は男性」という属性がある。何しろ、あの、大きくて、重い、鬼瓦を自在に動かしながら、粘土の塊から秀麗で、勢い、迫力、凄みのある鬼瓦を作らなければならない。女性には仕事柄、不向きな職場である。その不向きな職場に新星のごとく現れたのが(株)伊達屋である。平成26年(2014)に法人化して、

自営から株式会社になった。鬼師の世界では比較的新しい会社と言えよう。本業はプレスの鬼瓦や瓦の道具物の白地を作る会社である。(株)伊達屋になる前はトラスト・Dateといい、平成16年(2004)から営業を始めている。ところが今(2021年)から7年前に、伊達屋の中に、鬼瓦の手作り部門を立ち上げたのである。その部署を「YUHIRO」と命名している。理由は伊達屋の長女、伊達由尋が20歳になった時に、「私は手作りで、鬼瓦を作りたい」と言い出したのが発端である。そして、実際に鬼板屋である(株)石^{いし}英^{えい}へ鬼師になるために修業に出ている。現在は何と母親の伊達映見も加わって、YUHIROは女性二人で運営されている鬼板屋になっている。

映見自身は三州鬼板屋の中でも最も古い現存する鬼板屋の中の一つ、(株)鬼長の初代、浅井長之助の曾孫に当たる。(高原2017)(株)伊達屋は会社としては新しいが鬼師の血筋としては古い、新・旧が^な縋^ない交ぜになった会社なのである。そして、二人の女・鬼師によっ

て運営されるYUHIROを抱えるのが、「伊達」屋なのである。(図1)

YUHIROと鬼滅の刃

「鬼滅の刃」とのコラボに最初に手を挙げた鬼板屋がYUHIROであった。鬼滅の刃とのコラボレーションの企画は周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション―「はじまり」(高原2022)で述べているように、2017年11月30日の三州鬼瓦工芸品として国の認定を受けて動き始めている。ところが、一端、企画が始動すると、企画の場所は公開から非公開へと変わり、高浜市役所企画部総合政策グループ内の一部の人が企画実現に向けて進めて行ったのである。その動きは「はじまり」に詳述している。(高原2022)そして、突然、「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションへの参加の意向が各鬼板屋へファックスで打診されたのである。それがコラボ開催の年で、高浜市制50周年に当たる2021年5月頃であった。



図1 YUHIROにてインタビュー(高原隆：左、伊達由尋：中央、伊達映見：右)
令和3年8月6日

(コラボが行なわれたのは同年10月30日から翌年1月29日までである) 鬼板屋の鬼師たちはいきなりの知らせに心の準備さえも出来ていなかった。まして、実際の仕事(鬼瓦を作る)のスケジュールを日々、消化している最中に舞い込んで来た、未知の大型イベントだったのである。しかも、異業種との共同イベント(コラボ)は鬼師たちにとって初めての話であった。そして、その相手がアニメ産業だったのだ。そうした中でのYUHIROの参加表明一番乗りだったことになる。映見はなぜすぐに、参加の意向を示すことが出来たのかを話してくれた。

もともと、娘(由尋)とYUHIROを立ち上げた時に、やりたかった目標の一つがアニメとかゲームとかのコラボだったんですよ。

もう、この業界ってのが、瓦、鬼瓦とか、伝統的なものとかは、そのまま作って行かなくちゃいけないと思うんですけど、(注文又は需要が)どんどん減って来てるのが現状で、もう、下手すると、「何年か後には鬼瓦の仕事ってなくなってしまうんじゃないか」って言われるくらい減って来てます。

その中で、なぜ減って来てるかという点、若い人たちの鬼瓦、瓦離れがあると思うんですよ。その若い人たちがもう一度、瓦に目を向けてくれる切っ掛けっていうのがほしかったんで、そこに若い考え方でですね、娘とか、息子の若い考え方を入れると、今、若い、日本で一番、何ですかね、外国の人たちに向けて発信出来てるのが、アニメとかゲーム。

日本というのはアニメ文化だったりとか、あると思うんですよ。で、こういうものとのコラボっていうのも考えて行ったらどうだって事に、あの一、話が来たもんですか

ら。「いつかやりたいね」って。その努力はしてたんです。

娘がやりたいアニメの、それこそ、会社さんとかに連絡したりとかして、「すみませんが、コラボさせてもらえませんか」とか。そういう事もしてたんですけど、なかなかそれが実を結ばないっていうんですね。実行できない状態で。

で、たまたま、(鬼瓦)組合さんの方から「今回、高浜市が50周年を迎えるにあたって、組合で、鬼滅の刃とのコラボを考えてます」っていう話を春ぐらいに、去年の春ぐらいにもらったのかな。そして、お話を聞かせていただいた時に、もう何よりも娘が飛びついたんですね。「自分が見てるアニメで、絶対このアニメは来る」って、娘は確信してたんで…。

YUHIROが誕生したのが、2014年なので、かなり早い頃、既にYUHIROではアニメかゲームとのコラボレーションを考えており、さらには、それを具体的な目標にして、実際にアニメの会社にコラボの打診さえも行っていたのである。「はじめに」でも述べているが、アニメとのコラボは過去一度も行なったことは鬼師たちはない。しかし、三州鬼瓦の組合である三州瓦工業協同組合と高浜市役所企画部総合政策グループが「アニメ産業と鬼師のコラボ」の企画を立てた直接の切っ掛けは、やはり若手の鬼師からの会議の場での眩きであった。「アニメみたいなものとコラボが出来ないかなあ」(高原2022: 42) 四代目上鬼栄、神谷慎介の口から出た一言である。ちなみに、これは偶然ではあるが、初代上鬼栄の神谷栄吉(兄)と、初代鬼長の浅井長之助(弟)は実の兄弟である。その後裔がそれぞれ男女の違いはあれ、鬼師となり、似た考えを持っていたのだ。しかし、上鬼栄は今回の

鬼滅の刃とのコラボには参加しなかった。

娘の由尋本人も、アニメとのコラボ、特に鬼滅の刃について次のように語っている。

単行本、ずっと買ってて、すごく面白いで
すし、やっぱり和風のアニメなんで、コ
ラボしやすいっていうのもあって、「何か
出来ないかな」と思っていたんですけど、
なかなか機会が無かったんですけど。

つまり、由尋は「アニメとのコラボ」とい
う目標からさらに踏み込んで、具体的なアニメ
がすでに心の中にあったことになる。それが
「鬼滅の刃」であり、鬼滅の刃と鬼師との
親和性に気づいているのだった。由尋曰く、
「和風のアニメなんで、コラボしやすい」と。
一方の母親の映見は鬼滅の刃の知らせを鬼瓦
組合から受けて、由尋から参加の意向をすぐ
に伝えられ、さらに、「鬼滅の刃」を見るよう
に言われたのである。それもかなりの切迫感
をもって娘から勧められたことになる。

もう、速攻で、私（映見）に、「アニメを見
ろ」と言われて。（笑）「絶対に良いから」っ
て。その、コラボする前に言われまして、
「へーっ、じゃ、見てみる」って。

私、元々、アニメ見るとか、大好きなんで、
「見てみるよー」って。…見て…。「すごい
面白かった」って。

で、「そうー」って。

で、コラボすることになって、「これは是非
やりたい」って。で、やる限りはやっぱり、
あの、言ってみれば、ま、娘もオタクなん
ですけど、「オタクの心に刺さるものを作
りたい」。

はい、あの一、俄かに^{にわ}知っただけの、ただ

の商品では終わらせたくない。その考えが
あったんですよ。もう、「オタク心に刺さ
るものって、どういうものかな」って思っ
た時に、うちが、今、作らせていただいた
んですけど、「名場面プレート」って名前で、
呼んでるんですけど、そのオタクの人たち
がすごく、「あっ、このシーンで泣くな」と
か、「このシーン、感動するな」って、シー
ンを彫ろうって。…ていう事になりました、
名場面プレートを作ることになりました。（図
2、3）

何という発想であろう。「オタクの心に刺
さるものを作りたい」と考えた鬼師、由尋は、
「鬼滅の刃」のオタクである。由尋の中です
でに鬼師と鬼滅の刃がコラボレーションを起
こしていたところに、現実的なコラボの企画
が舞い降りて来たのだ。由尋が考案した「鬼
滅の刃」コラボグッズが「名場面プレート」で
あった。ただ、残念なことに、ここでも（株）
丸市の加藤佳敬とインタビューした際に起
きたことと同じことが私に起きていた。（高
原2022）つまり、インタビューをする私自身
（2021年8月6日時点）が「鬼滅の刃」のオタ
クレベルに達しておらず、由尋が言う「に・
わ・かに知っただけの」レベルの人間だった
ことである。それ故に、実際に、由尋の言う
「名場面プレート」を由尋本人から見せても
らっても、感動に火が伴わないのだった。出
来具合が素晴らしいのはわかるのであるが。
新約聖書、マタイ福音書に出る譬え「豚に真
珠」（cast pearls before swine）（井上、赤野
2019：1471）そのものが私に起きていると痛
感したフィールドワークであった。それを
YUHIROで思い知らされたのだ。

YUHIROは「鬼滅の刃」とのコラボを大き
な転換点と捉えていた。「何かが変わった」と
言うのである。映見が次のように話すので
あった。

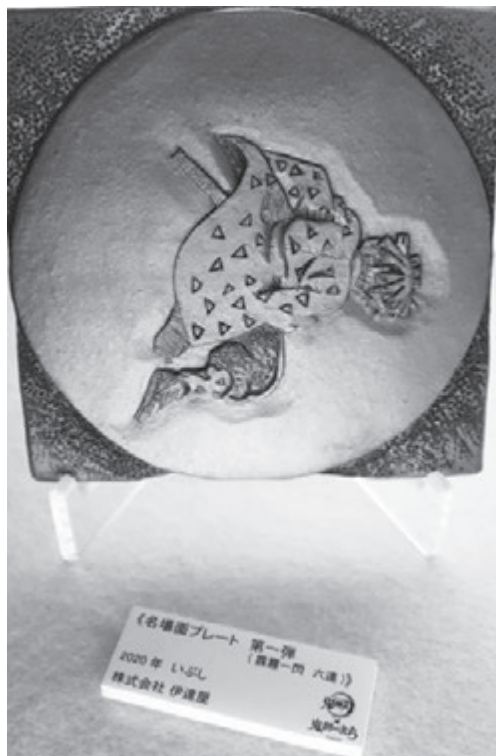


図2 名場面プレート 霹靂一閃 六連
(かわら美術館)



図3 名場面プレート 猪突猛進
(かわら美術館)

やっぱり、この文化っていうのは、日本文化なんで、アニメっていうのは。「絶対、それを発信して行く事が、今後、瓦業界を変えることになって行く」という、あの、娘は考えていまして。もともと、そういう事を言ってたもんですから。

もう、その夢をかなえてあげたいのは親心だったんですけど、それをどうして行っていいのかっていうのが、ずーっとあったんですけど…。

本当、鬼滅の刃でもものすごく何かいろんなものが開花しました。それまでは、絵を彫るなんてことはやったことが無かったです。

映見は、まず、絵を彫る技術が開花したと言っている。何しろ、「名場面プレート」をオ

タク用に作らなければいけないのだ。そして、すぐ隣に、鬼師で、「鬼滅の刃」のオタクである由尋がいるのである。

あの、立体物の鬼瓦とかは、彫ったりとか、作ったりとかはあるんですけど、絵を彫るってのは、何が一番難しいかなって思った時に、もし私がいなかった時に、オタクの人が、「えーっ、全然似てない!」とか、そういう事を言われてしまったら、商品として絶対ダメだと思うんですよ。

その為には、一番身近なオタクである娘に見てもらって、「どうーっ?」「うーん、お母さん、似てないよ。これ、ダメ。没!」とか。散々やられました。(笑)

何を隠そう、映見自身も、アニメオタクで

あり、鬼滅の刃とのコラボで、映見は自らYUHIROを修業の場にしたのであった。それも、二重の意味でオタクだった。アニメはもとより、鬼師として、「鬼師」オタクなのである。

「好きこそ、ものの上手なれ」。(大笑)本当に好きなんです。アニメとかが。はい。

だから、出来れば、今後、鬼滅の刃の次の段階で、また違うアニメとのコラボをやって行きたいなってことをすごく考えています。それによって、瓦を見直す切っ掛けを作ることができたらってことをすごく思っています。

つまり、開花したのは、技術はもとより、コラボそのものの効果に開眼したという事になる。その効果が、アニメとのコラボがもたらす「瓦を見直す力」であり、それを体験的に悟ったのだ。映見はその力について次のように語っている。

多分、あの、瓦ってのは、体験の方って、来られて。見ていただくことも多いんですが、あの、屋根の上に載ってるんで普段、身近に見るって無いんですよ。見上げて、「あー、あそこに瓦載ってるな」程度なんですけど。

身近に、こうやって工房で作って、見ていただくことによって、初めて、「瓦って、ああ、こういう質感なんだ」とか、「こういう色合いなんだ」って。そういう事を知っていただくという事が出来てるんで、それが結局、鬼滅の刃によって、若い人たちも瓦に触れる切っ掛けが出来て、広がる切っ掛けになったんじゃないかなと思います。

この活動が、この間の3か月間だけだった

んで、それをもうちょっと期間を長くしたりだとか、発信ももっと消極的なところがあったんですけど、もっと、ボーンと発信して行けられるようなことを今後もやって行けたらという事をすごく感じています。

出来れば海外の方とかにもこういう瓦ってものを知っていただきたいなって思っています、はい。

特に、瓦を実際に知って、もう一度「鬼滅の刃」を見ると、「鬼滅の刃」の各シーンに、日本家屋や日本屋根が多く背景として多用されているのが見えて来るのがわかるし、その背景が反対に前景化を起こして浮き上がって来る感覚になる。屋根と屋根と屋根と…と、屋根が集まって、薨の波になり、独特な景観を作り浮かび上がる。各地の世界遺産に指定されている町は、この効果が目覚ましいのは、洋の東西を問わず事実である。

YUHIROの体験工房に来た人々は映見が語っているように、瓦の良さ、本物の瓦を実体験を通して知って行った。その時にただ「瓦」を知るだけでなく、多くの人が驚嘆したのが、工房に展示されている「名場面プレート」の存在であった。各一枚一枚の名場面プレートに通底する心が「オタクの心に刺さるものを作りたい」である。その反響の様を映見は話してくれた。(図4)

うち、その、体験会をやった時に多くの方が手作りに来てくれたんですけど、その人たち、ま、あの一、皆さん、「私、オタクなんだよね。オタクなんだよね」っていう風に来ていただいて、そういう方たちに見てもらった時に、あの、「すごく良い！」って。

「伊達さんはすごく、オタク心に刺さるものを作ってくれる」とか、「オタクの気持ちが分かってる」とか。



図4 名場面プレート 全集中の呼吸(鍛錬)炭治郎^{まびと}vs.錆兎(YUHIRO展示室)

あの、「商品を見ても、ああ、よくあるそこら辺の、キーホルダーと同じで、場面のものをただ持って来てるだけだね」とか、「ただ印刷しただけだね」というものではなくて、「伊達さんが作るものって、すごく心が伝わって来る」とってことをおっしゃっていただいて、そんな時は、泣けるほど嬉しかったです。(笑)(図5)

しかも、ただ単なる一回きりの工房体験に終わらず、感動のあまり、また訪れる人々まで出て来たのである。このコロナ禍の中を。文字通り、「オタクの心に刺さるもの」がそこに在ったことになる。

その、オタクの方たちがすごく認めてくれたっていうのもすごく嬉しかったですし、あと、あの一、中には、それこそ、自



図5 名場面プレート よく生きてもどった (YUHIRO展示室) ; サイズ15cm角

分の大事な鬼滅の刃の宝物みたいなものを持って来ていただいて、「良かったら、これ、工房に飾って下さい」って、持って来られた方もいて。マンガ本下さった方とか。(笑) ねっ、いろんなもの、もらったね。ほんと、それこそ、「やってくれて有難う」みたいな言葉をいただいたり。

今だに、「その工房を見たい」って来られる

方がいます。

何と、コラボ期間中はまだしも、「鬼滅の刃」とのコラボが終了した後でも、噂が噂を呼び、特にオタクであれば尚更なのであろう。今だに人が絶えないのである。

鬼滅の刃の期間は終わったんで、大々的には、こう、バーンとはやらないんですけど、

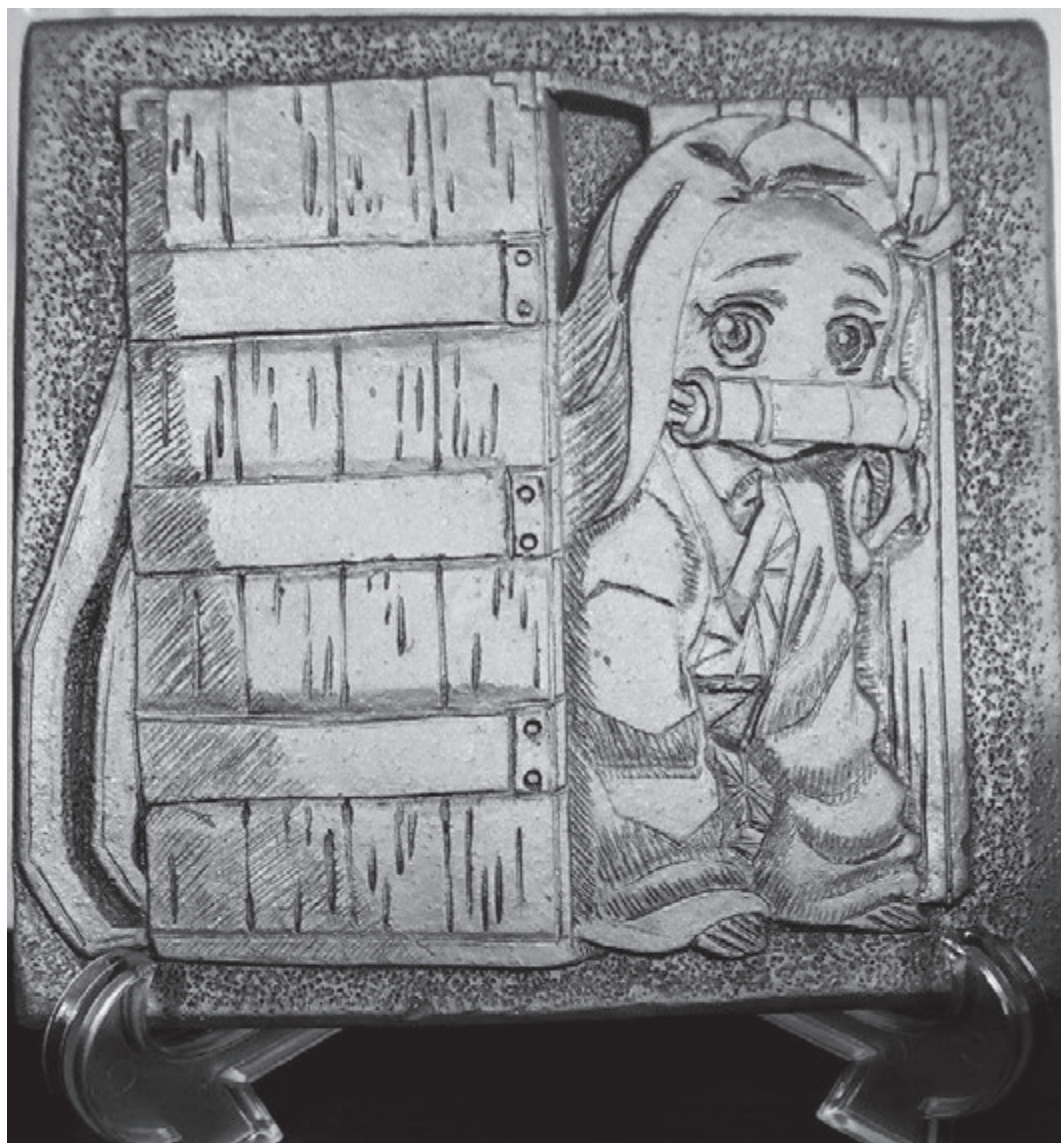


図6 名場面プレート ひょっこり (YUHIRO展示室)

やっぱりオタク伝えに聞いたとか、…いう感じで、「この工房に、鬼滅の刃の商品がまだ飾ってある」って聞いて、「是非、生で見せて下さい」って。(図6)

その代わりに、SNSって駄目ですし、その、外に発信することもダメですって。だけど、見るだけなら、好きなように見て、和んでいったらと思って。そうすると、ま、「今日、

行きます」って連絡もらうと来ていただいて、見ていただいて、皆さんすごく喜んで帰って行かれてってという感じですね。

「出来れば、今後も、もっと鬼滅を作り続けて下さい」っておっしゃっていただけるんですけど、問題は作っても、儲けにはならないんで。(笑) ただの趣味で終わって行くってところが大変ですけど。でも、



図7 名場面プレート 何処へ行くときも一緒だ (YUHIRO展示室)

そうやって皆さん、喜んでくれるなら、出来れば、沢山、鬼滅のものでも、他のアニメのものでも、作って行けたらなと思っています。(図7)

名場面プレート

オタクの心に突き刺さるYUHIROグッズの代表が「名場面プレート」である。鬼滅の刃の中の涙が流れる、心を打つ、様々な場面を粘土板に彫り込んだものを、鬼瓦や和瓦を焼成するのと同じやり方で、窯から焼き上げたいぶし銀の粘土板である。黒みがかった灰色をしており、光の加減と光の当たる角

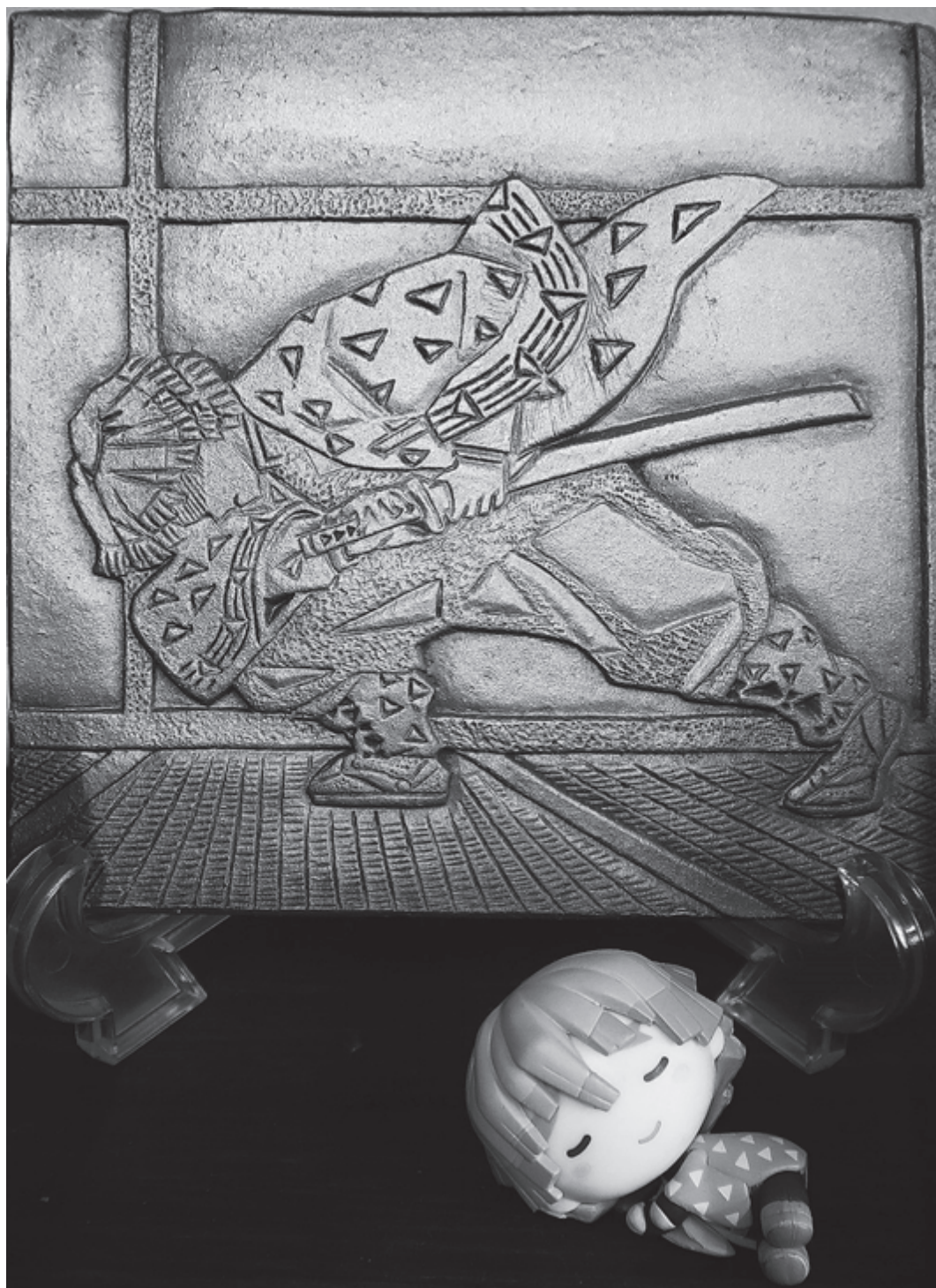


図8 名場面プレート 霹靂一閃 (YUHIRO展示室)



図9 名場面プレート 毒の剣士 (YUHIRO展示室)

度によって、光沢（銀色）が出る。YUHIROで、映見と由尋と共に名場面プレートを見せてもらった。もちろん二人の解説付きである。名場面プレートは15cm角の四角い板である。正直言って、当時、つまり、この時はすでに述べてはいるが、「鬼滅の刃」は一度見ただけであった。しかも見たのはアマゾンからの無料配信されたアニメ版のみであり、劇場版の「無限列車編」も、漫画コミックの「鬼滅の刃」

さえも見ていなかったのである。現在（2022年9月30日）では、アニメ版は「遊郭編」まで完成しており、一般公開されている。ここでは名場面プレートがいかにも出来上がって行ったかについて紹介していきたい。映見がその過程を説明してくれた。（図8、9）

主に娘が多かったんですけど、一応、私が拾って来るんですよ、アニメの中で。

向こうのアニプレックスさん（「鬼滅の刃」のアニメーションを企画・制作する会社）の方から場面の、百何十種類だったかな。来るんですよ。で、「この場面だったら使ってもいいですよ」っていうのが。「商品として使っていいですよ」っと。

勝手に、絵は向こうと話をちゃんとして、「これは使っていいか」、話し合って行かないといけないんですけど、向こうから事前に来た場面絵がありまして、「この中のものだったら使っていいよ」というのがありましたんで…。

まず、私が「この場面、好きだから」とか、「この場面、良かったよね」って言って、選んでいって、その選んだ中から、今度、娘が、「あっ、これは作っても多分売れないよ」って、好きでも、やっぱり、売れるものと、売れないものってあると思うんですよ。

こうして、選ばれた場面絵が、デザインとして次の段階へ回されて行く。それが、粘土板へのデザインの転写である。そして、転写されたデザインを今度は、^{へら}篋を使って彫って行くのである。映見の話が続く。

選択したものを、今度は印刷して、それを一つずつ作って行く。でも、似ないと、その場で「ダメー」とか、って言われるんで、「そっかー、どこがダメー？」って言いながら、(笑)やりましたね。

本当に、一枚絵を作るんでも、本当に心の中で葛藤ですよ。二人の葛藤があって、そして、下手すると、ずーっと喧嘩して、口きかない時もあったりとか。(笑) そんな事やりました。

やっぱり、こっちは(由尋) 妥協しないん

ですよ。自分はもう、このアニメが好きなので、絶対こういうもの作らにゃきゅーっていうのがあるんで、妥協してくれないし、こっちは「この位だったら似てない？」とか。「そりゃ、似てない！似てないから、こりゃダメ」とか。「そうしたら、どうやって直す？」って言ったら、「ここ、こうやって直して」とか言って、言われながらやってました。はい、結構厳しいです、この人は。(大笑)

ここで、YUHIROにおける、映見と由尋の関係が少しは見えて来たのではないかと思います。二人は母と娘だが、二人で一人の関係をYUHIROでは形成している。いわゆる二人三脚である。その事について由尋は次のように言っている。

もともと在るものを、その、同じように直していくってことは得意で、自分で考えるっていうのは、まだまだ、すごく苦手なもので、ので、新しいものを作る時のデザインとかは母に頼まなきゃ、私だけでは難しいんですけど、その、今回の鬼滅に関しては、元の絵がありますし、アニメも見てるので、個々のバックはこんな感じっていうのは、全部わかってるので、それをその通りに作って行くっていうのは、母より私の方が得意なので、ここで作ったやつを、ここで監修してから、ちゃんとした監修さんに通すんで。

YUHIROで、名場面が選ばれ、そのデザインを粘土板に写し、篋で彫り込み、映見と由尋が自己監修にかけるのである。そこで合格したプレートを写真に撮り、デザインの著作権を持っている会社、フェザン・レーヴに第一次監修として送られるのである。そして、第一次監修を通ったものが、(株)アニプレックスへ送られる仕組みである。映見がその監修

の様子を語っている。

監修さんも、最初のうちは、すごく厳しかったですよ。見るのも。「そこは…」、「ここは…」っていうのが来たんです。けど、そのうちに、向こうへ(写真が)行っても、「伊達さんそこはいいよ。大丈夫、大丈夫」。「すごい。全然」。

最後、監修さんが「この絵で、こういう風に作って」って。(監修さんへ) 写真を送っても、全然、すぐ、ポン通っちゃったんで。

それだけ向こうも信用してくれて、「伊達さんとこの商品だったらいいよ」って、言ってくれたんだってというのがすごく感じましたね。

さらに、ただ単に写真による監修だけではなく、何と、コロナ禍の中をわざわざ(株)フェザン・レーヴは監修に実地検証として訪れている。映見がその様を話してくれた。

実際に、その、アニプレックスさんと、うちと、高浜市との間に、フェザン・レーヴさんって会社が入って、そちらの会社が、えーっと、第一段階の監修っていうのをしてくれるんですけど、その方が、東京の方からいらっしゃって、ここを見ていただいた時に、もう、「これ、ほしい」、「あれ、ほしい」って言いながら、撮っていただいて、写真。

バンバン撮っていただいて、「すごい、いい」、「すごい、いいよ」、「伊達さんとこの商品、すごい、良いね」って言って頂けたんで、「あー、作って良かった!」ってすごく思いました。(笑)

「オタクの心に刺さる」現象が「鬼滅の刃」

と「鬼師」のコラボの監修元の担当者に起きているのだ。この事は意味深長である。(株)フェザン・レーヴの監修者は、「鬼滅の刃」の各場面に精通している。ある意味、オタクを超えた存在である。その監修者が「ほしい」、「いい」と監修を受けている当人の目の前で叫ぶわけである。もちろん、「名場面プレート」の良さは十分に実証されている。しかし、それ以上の何かが、「名場面プレート」にはあり、それはひいては今回の「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションそのものに存在していると推測される。この事はすでに書いた「(株)丸市」の次の文章と重なり合ってくる。それは、(株)丸市の社長、加藤佳敬がインタビューの際、席を離れて、佳敬が作った禰豆子のモニュメント(1尺角のレリーフ)を持って来た時を描写したものである。

実際に制作した鬼師の手にある禰豆子を見るのはまた別格であった。矢張り彫り込みによる凹凸で、光の陰影が出来、漫画にあるデザインとしての禰豆子に深みが生じ、よりリアルな禰豆子が誕生していた。しばらく感動して話が止まっていた。(高原2022)

レリーフによる彫りの深みなので、立体とは違い、僅かな深み(1mm〜5mmほど)である。しかし、この深みが、様々な傾斜、深淺、細太を作って、光と影の濃淡を形成し、原画のデザインに生命を与えるのである。つまり、別次元の「鬼滅の刃」が誕生したことになる。いつも、二次元のフラットな「鬼滅の刃」を見慣れている(株)フェザン・レーヴの監修者は「新・鬼滅の刃」の誕生に目を見張ったのだ。様々な業種の会社と「鬼滅の刃」はコラボレーションをして来ているが、今回の「鬼師」とのコラボによる「新・鬼滅の刃」の誕生は、(株)フェザン・レーヴ、そしてその親会社(株)アニプレックスにとっては、想定外の出来事であったことは間違いない。



図10 我妻善逸モニュメント (YUHIRO展示室)；サイズ1尺角(約30cm平方)

では、名場面プレートはいくつ彫られたのであろうか。「最終的には、何種類ぐらい作られたんですか」と尋ねてみた。その返って来た答えが半端ではない数字であり、それを聞いてさらに驚いたのは言うまでもない。YUHIROのコラボにかける意気込みと、「鬼滅の刃」への陶醉、没頭さを表していた。文字通りのオタクであった。由尋が答えてくれた。

17種類(名場面プレート)と、ペーパーウェイトが4種類ですね。上にモニュメント(コラボの為の一般用公開記念レリーフ)が3種類。(図10、11、12)

これだけでもほかの鬼板屋と比べてもはるかに種類が多いのだが、由尋はさらに数を増して行ったのである。ただの水増しではなかった。尋常ではない事に惚けていても気づ



図11 蟲柱・胡蝶しのぶモニュメント(高浜市役所玄関前)

かざるを得ない事態であった。

で、あとは、こちらの壁なら、もう趣味で作ってるものなんで、こちらは販売用ではなくって、趣味用ですね。

場面によって、使っていい場面と使っていけない場面があるみたいで。で、こちらで、「この場面、良いかな」って作ってみた

ら、「これはダメなんだよ」って。アニプレックス側でも、「権利がないんで」っていうものも、あるみたいで。

そういうので、「ダメ」って、弾かれたものもあるんですけど…。結構、もう何種類も、何種類も、…作って。

こちらが、許可が下りてないものなんで。

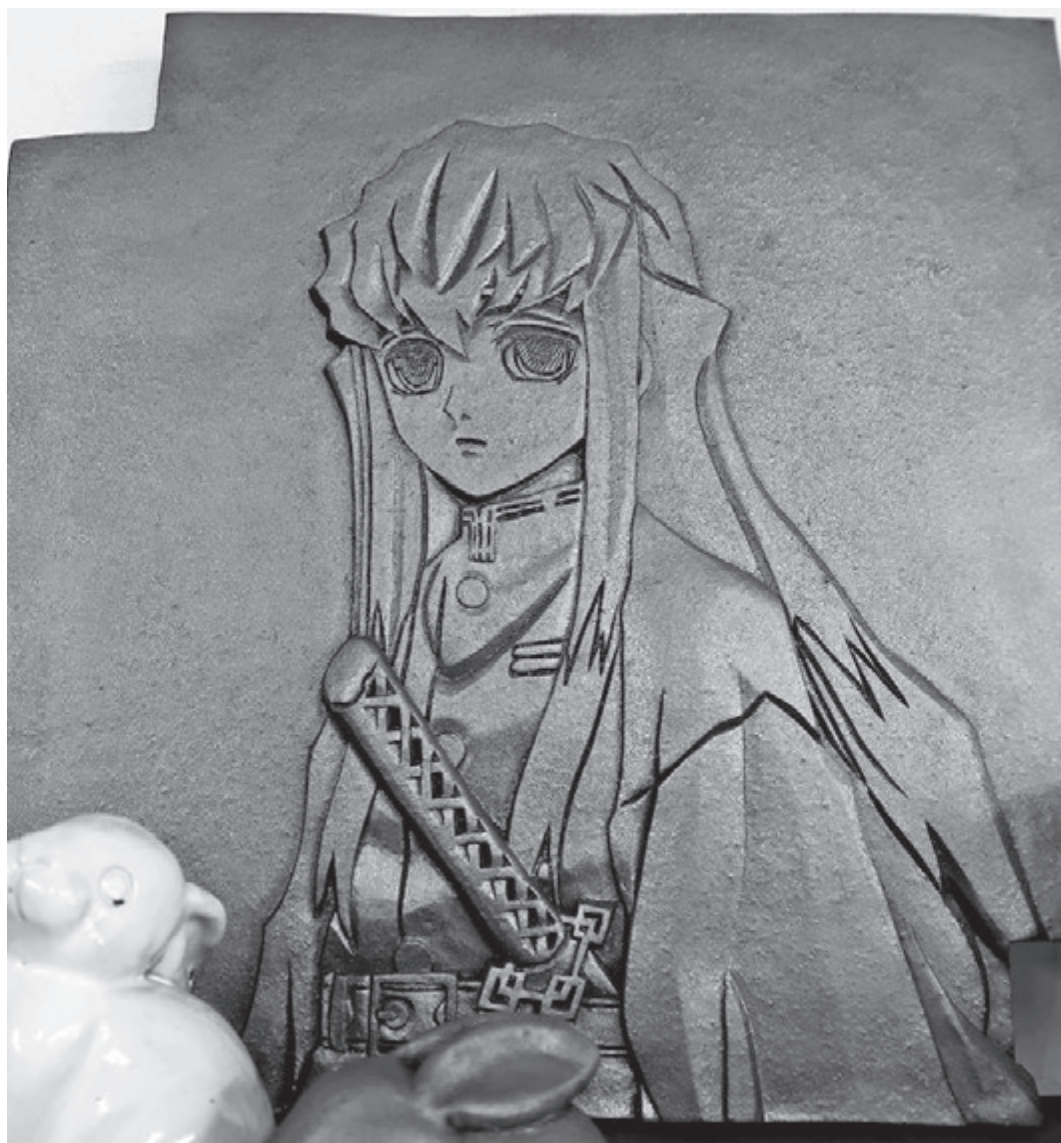


図12 霞柱・時透無一郎モニュメント (YUHIRO展示室)

あちらの方はここで見ていただく分には、まあ、私の趣味で作ったという形で、見ていただけるんで、いいんですけど…。

ただ、ただ、噂で、「伊達さんとか、すごい、商品以外のものがあるって、すごい良かった」って言うと、そういう方から電話が掛かって来て、「見に行きたいんですけどー！」(笑) って、今だに来られます。最

近だと、一週間ぐらい前に… (2021年8月1日頃か)。(図13)

実際に、この時、映見と由尋の話を聞きながら、YUHIROの壁にある一品一品立て掛けである「名場面プレート」を見ていたのである。その時、出て来た私の言葉が次である。

オタクの心を打つっていう…。うーん。心



図13 炭治郎、禰豆子、善逸、伊之助と九柱：富岡義勇、胡蝶しのぶ、煉獄杏寿郎、宇髄天元、悲鳴嶼行冥、不死川実弥、時透無一郎、(栗花落カナヲ)、伊黒小芭内、甘露寺蜜璃 (YUHIRO展示室)

を刺す鬼滅の「刃」っていう感じで、(大笑)
… 刺されると「参った」っていう感じで。
(笑)

この言葉を受けて、映見が制作の裏話をまた語ってくれた。

本当にそんな感じです。(笑)

鬼滅の刃があって、すごく学んだことが多かったんで、それこそ絵の振り方とかも、今まで、もともと…。私、もともと絵を描く人間なんです。絵描きもやってたんで。

で、だから、私がデザインとかもやるっていうのはそういうところにあります。デザインして、漫画描いたりとか、絵を描いた

りとかしてたもんですから。

で、それで、デザインして、それを娘に渡すと、娘が立体化したりとかして、作ってくれる。作ってくれたら、今度は自分のデザインなので、今度は私が監修して、「こういうこと直してほしい」とか、「ここは嫌だな」とか…。

で、また娘がそれを見ながら、「あーだ、こーだ」と言って、ここで、喧嘩が起きて、で、そのうちに、一つの商品が出来てくっという流れです。

YUHIROでの映見と由尋の関係を少し前に「二人三脚」と称したが、本人自身がすでにその事を自覚し、実行しているのである。

だから本当に、二人三脚でやってます。グループというのはそういう事ですね。1人だけでの力ではやっていけない。誰かの手伝いをするのではなく、私の仕事は私の仕事っていう風にちゃんと分担してやってるっていう感じです。

女性の鬼師

YUHIROは(株)伊達屋の中の「鬼瓦の手作り」部門として2014年に始まっている。二人の鬼師、映見と由尋がその構成メンバーであり、三州(三河国の別称:愛知県東部)で、女性のための鬼師で成り立つ鬼板屋は他にない。ただ完全に独立した鬼板屋ではなく、プレスの鬼瓦や瓦の道具物を製造する白地屋、(株)伊達屋の中の一構成部署なのである。女性の鬼師は、実際、他にも活躍している。皆無ではない。2017年に『鬼師の世界』を纏めた時には女性の鬼師は単独では入れてない。1998年から始めた「鬼師」のフィールドワークの中で、女性が鬼師として独立した形で働いて

いたのは、私自身が知る限りでは、(有)岩月鬼瓦の岩月久美である。ただ独立した鬼師としては扱っておらず、岩月鬼瓦の一職人として半ページほど記述しているのみである。夫の岩月秀之が次のように述べている。

いやー、多分珍しいと思いますよ。誰も多分見ても信じられないと思いますよ。(高原2017:308)

この久美を見て、いつか「女性の鬼師」を纏めることができればと、当時、思っていた。もちろん、鬼板屋では多くが夫婦で運営されている形態をとっており、主人の鬼師を中心に、奥さんは何らかの補助的な仕事をしているのであった。そうした中で、久美は別格だったのである。

時は流れて、現在、久美とは違うタイプではあるが、独立した女性の鬼師が現れた。それがYUHIROである。映見は次のように話している。

この業界、それこそ女性の鬼師さんとか、いないことはないですよ。まあ、ちゃんと試験を受けた鬼師さんっていうのは少ないんですけど…。

鬼師さんっていうのはいくらかでも女性で手伝いの方はいるんですけど、どうしても男性の鬼師さんの手伝いが多いんですよ。自分でゼロから作り上げるって方が少ないんです。

その中で、もう私たちは女性としてゼロからのスタートっていうんですかね。何もかもゼロから作って行くっていう事を、デザインから何から何まで全部やるっていうのをコンセプトにやってます。

ただここで出て来るのが、なぜ鬼師は男性

が中心に成り立っている業種なのかの根本原因である。通常の鬼瓦を一人で抱えてみたらわかるが、「重い」の一言に尽きる。何しろ力まないと上がらない。腰痛持ちの人は持ち上げるのは始めから無理である。しかし、職業柄、鬼師は腰痛持ちが多いのも事実である。腰にコルセットやベルトを当てている人もいる。そして、通常の重さを超える鬼瓦が多い事も事実である。サイズが少し変わるだけで、体積と重さが一気に増え、鬼瓦が持つ迫力がそれだけで変化する。そうした環境下での、YUHIROなのである。映見はYUHIROについて次のように言っている。

YUHIROっていうグループの中には男性は、今、いないです。それによってちょっと、あの、困ってるって事というのが、男性の方っていうのは力があるんで、鬼瓦とか、引っくり返したりだとか、持ち上げたりとか、容易に出来るんですけど…。

私たち、女性なんで、そういう事がやっぱり難しいんですよ。だから、大きいものが作れないっていうのが。はい、皆さん、鬼師さん、大きなもの作りますよね。ああいうものは出来ないですね。やっぱり力がちょっと足りないんで。

映見の話を聞いていると、昔、若い頃に柔道をやっていた時の事を思い出す。一度だけであったが、日本体育大学柔道部元主将の師範がこう言っていた。「力も技の一つである」と。それが妙に心に残っていたのだ。突き刺さるように。「柔能く剛を制す」とそれまで思っていたが…。YUHIROの対策は既に決まっていた。

私たちは、私たちのやってることは、「私たちのできる範囲でしかやらないでおう」って決めてるんで。

こう、仕事っていうのは、鬼師さんが頑張ってくくれる鬼師の仕事っていうのが、を、私たちが、新参者が入ったところで、その仕事を取ったら、結局、仕事の取り合いになっちゃうと思うんですよ。

だから、皆さんがやってないことを、私たちがやることによって、仕事を取るんじゃなくて、仕事を広げるって考え方でやります。

YUHIROは独自の企業理念を持っており、新しい鬼師、つまり、女性の鬼師による「新・鬼師の世界」を創造しようとしているのである。そして「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションは正にその企業理念と合致したモデルとしての新事業だったのである。映見の言葉が続く。

新しい事を私たちがやれば、他の鬼師さんたちが、「あっ、そういう事もやれるんだ」とか、「そういう方法もあるんだね」っていう事を感じてもらえると思うんで、だから、私たちは鬼瓦業界で、注文入れば鬼瓦作ります。そこらへん、今ある鬼瓦、作らせていただくんですけど、だけど、特に他人の仕事には手を出さない。なるべく。その代わり、私たちは新しい鬼瓦業界の仕事を創って行くっていう感じで動いています。

まとめ

(株)伊達屋－YUHIROを「周縁の再中心化:「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション」のテーマで完成させようと企画はしたものの、紀要の枠組みをはみ出してしまいう事が見えて来た。その対策として、分割して、二部構成を取ることにした。YUHIROは映見と由尋の二人三脚で運営されている。それを反映させて、この章も二部立てにし、YUHIRO I と



図14 名場面プレート 爆血 (YUHIRO展示室)

YUHIRO IIを作る。今回の章はYUHIRO Iということになる。YUHIRO Iは映見も由尋も出ては来るが、主に語っているのは、母親の映見である。つまり、YUHIRO IIではやはり二人が登場するが、娘の由尋が主役を演ずるという仕組みになる。そして、YUHIRO IとYUHIRO IIを合わせて、一つのYUHIROになる。文字通りの二人三脚で、文章上においても、実際の(株)伊達屋のYUHIROと同

じ構成を取ることができる。

YUHIROは「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションに参加した三州の鬼板屋の中でユニークな存在であった。他の鬼板屋と比べて歴史が浅い鬼板屋であることがまず挙げられる。2014年に始まっている。(株)伊達屋の中の手作り部門という鬼板屋である。つまり、プレスの白地屋の中から派生した手作りの白地屋という立ち位置を持つ。同様の流れを持

つ鬼板屋は他にも存在する。由尋が鬼師の修業に行った先、(株) 石英がまさに今の(株) 伊達屋と同じ形態を持っている。ただ(株) 石英は元々はプレスの白地屋から始まっているが、今では、大型のガス窯を持つ黒地の鬼板屋になっている。その石英の中に鬼瓦の手作り部門があり、現在、社長になっている石川智昭が手作りが出来るその鬼師なのである。他にもプレスの白地屋から手作りの鬼師へと変容していった会社は存在する。萩原製陶所の四代目萩原尚がその一人である。また、山下鬼瓦白地からは二代目の山下敦が鬼師、鬼敦として活躍している。大半の鬼板屋は初代が手作りの鬼師で、その技を受け継ぎながら代を重ねて来ているが、例外的に、プレスの白地屋からも手作りの鬼師を目指して努力をし、独立した鬼師になっているのは事実である。YUHIROはその例外の部類に属しているのだ。

ただ、YUHIROにユニークさを与えているのは、やはり、女性の鬼師である事に尽きる。それも二人の女性の鬼師がYUHIROを支えているのだ。本文でも指摘したように、鬼師の世界は基本、男性向きの職場である。事実、男性の鬼師が大半を占める。理由は扱う製品が鬼瓦であり、特に手作りが要求される鬼瓦は主に、神社仏閣に用いられるものが多い。一般民家に比べて、神社仏閣は建物自体が何倍も、時には何十倍も大きい。そういった建物の大棟や隅棟などを飾るのが鬼瓦である。当然大きさは一般民家の鬼瓦とは比べ物にならないサイズと重さになる。鬼師の技は凄い。そこに入る必須要素の一つが「力技」なのである。ところが、物は考えようで、2020年東京オリンピックでの、日本女子柔道の活躍は世界を驚かせた。女子レスリングでも同様である。全て精神、技術、肉体：「心、技、体」の極みである。そうした世界へ、YUHIROは入ったことになる。ただ、YUHIROは初めての女性鬼師ではない。本文中にも引き合

いに出した岩月鬼瓦はその例である。他にも、山下鬼瓦の敦からも、若い女性が鬼師を目指して励んでいるとの連絡ももらっている。「女性の鬼師」の新・鬼師の世界が整いつつあるのは事実である。

YUHIROが「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーションで特にユニークだったのは、「名場面プレート」を創造した事である。15cm角の粘土板に「オタクの心に刺さる」鬼滅の刃の感動シーンを鬼師の篋で彫り込んだものである。それを鬼瓦と同様の焼成を窯でかけて、いぶし銀の焼きを入れている。名場面プレートがユニークなのはアニメオタクのYUHIROが選んだ「オタクの、オタクによる、オタクのための」名場面プレートである事である。1863年のエイブラハム・リンカーン大統領によるゲティスバーグでの演説を振^{もじ}ってはいるが。リンカーンの演説のこの言葉もやはり、そして今もなお、人々の心に刺さるものの代表例と言えよう。

“government of the people, by the people, for the people” by Abraham Lincoln (岸野2018) YUHIROの「名場面プレート」とLincolnの「民主主義」をここに並べるのはやや場違いな感はあるかもしれないが、そこに通底するのは同じ精神なのである。(図14)

参考文献

- 井上永幸、赤野一郎編 2019年『ウィズダム英和辞典第4版』三省堂
- 来塩野英治編 2018年『ウィズダム和英辞典第3版』三省堂
- 高原 隆 2022年－1「新・鬼師の世界－周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション－(株)丸市－『文明21』第49号
- 2022年－2「新・鬼師の世界－周縁の再中心化：「鬼滅の刃」と「鬼師」のコラボレーション－はじまり－ 愛知大学総合郷土研究所紀要 第67輯：33-54.
- 2017年『鬼師の世界』あるむ